

令和２年度 学校評価システムシート 香川県立石田高等学校

教育方針	全人教育を重視し、人格の向上を図る。将来の郷土を担う人材を育成する。
------	------------------------------------

重点目標	１．基礎学力の充実に努め、学習指導の向上を図る。 ２．基本的生活習慣の確立をめざし、自律的精神の向上を図る。 ３．各種クラブ活動の活性化に努め、強靱な体力と精神力の育成を図る。 ４．教育環境の整備・充実に努め、愛護と活用精神の向上を図る。 ５．生命を大切にし、人権を尊重する精神の向上を図る。 ６．地域に根ざした学校づくりを推進する。 ７．国際化・情報化社会に対応できる人間の育成をめざす。
------	---

達成度	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	おおむね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学 校 自 己 評 価				年 度 評 価		
年 度 目 標				年 度 評 価		
領域	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
生産経済科	地域社会に貢献できる人材を育成するため、専門教科の理解を深める。	生産経済科で実施する検定の指導を充実させる。農業技術検定に重点をおき、基礎的内容の定着を図る。	農業技術検定３級の合格率 A 70％以上 B 50％以上 C 30％以上 D 30％未満	今年度の農業技術検定３級の合格率は62％であった。畜産などの専門分野は正答率が比較的高かった。農業経営や園芸分野の知識の定着を図ることが合格率の上昇につながると感じた。	B	1年次の「農業と環境」で基礎的な栽培分野を定着させることで合格者の増加につなげたい。また、農業への興味・関心を高め、意欲的に農業技術検定の合格を目指した学習に取り組ませることが大切である。出題範囲は広いが基礎的な内容が多いので農業小テストなどを利用した学習を進めたい。
園芸デザイン科	農業に関する知識を身につけ、その多面的機能を理解する。体験的な学習を通して、豊かな心を備えた産業人を育成する。	農業に関心を持ち、農業技術検定合格を目指す学習意欲が高まるよう指導する。地域交流や地域貢献の機会を設ける。	農業技術検定３級は70％以上の生徒が合格できたか。農業技術検定２級を目指す生徒を多数輩出する。地域の行事や交流会に参加できたか。	農業技術検定３級は 67％の生徒が合格できた。当初 10 名の生徒が農業技術検定２級を目指したが、前期試験の中止が影響して半減した。地域の行事や交流会も中止が相次ぎ参加できなかった。	B	農業技術検定と授業との関連づけを見直し、全員合格を目指す。さらに受験をきっかけとして、他の資格取得への意欲を喚起させたい。将来の地域社会に貢献する、地域を愛する人材育成を目指し、積極的に地域行事に参加する。
農業土木科	資格取得を勧め、土木技術者として必要な、知識・技術・態度を育てる。	資格取得指導に留まらず、タブレットなどを利用して現場の疑似体験を実施し、産業としての土木に興味・関心を持たせ、学習意欲の向上を図る。	年間一人あたりの資格取得数 A：1.2 以上 B：1.1 以上 C：1.0 以上 D：1.0 以下	タブレットを利用した学習では、琵琶湖疎水を題材に実施し、学習意欲の向上を図った。資格取得では、測量士補 4 名・2 級施工管理技士（学科）10 名・危険物取扱者のべ 62 名など、一人あたり 1.3 の取得となっている。	A	測量士補試験が令和２年度 6 月から 11 月に変更になったため、トレースや 2 級施工管理技士（学科）と時期が重なった。令和３年度も、測量士補が 8 月以降と試験日が未定のままである。このため指導計画が確定していない状態であるが、見切り発車的に指導を開始している。
家庭科	家庭科の学習で身につけた知識や技能を進路決定に活かす。	プロの外部講師による指導を通して職業や進路への関心を深めさせる。身につけた知識や技能のレベルアップを目指し、資格取得に積極的に取り組むよう、意識向上に努める。	家庭科に関する専門性を生かした進路選択をしたか。 A：3 学年とも前年度より増加 B：前年度より増加 C：前年度と同等 D：前年度より減少	学年が上がるとともに、希望進路に専門性を生かせる分野を選ぶ傾向が見られた。3 年生では、1 年次 20％、2 年次 25％、3 年次 55％という結果であった。	A	今年度は臨時休校やコロナウイルス感染予防のため、外部講師に依頼することが難しかったが、次年度は感染予防に努め、プロによる指導の機会を確保したり、積極的にコンテストに挑戦できるよう計画していきたい。
教務	家庭学習の習慣を身につけさせる。	宿題や課題を課し、家庭において学習ができるよう工夫する。個別指導を充実し、学習意欲の高い生徒の引き上げとともに、学習の苦手な生徒の指導にも力を入れる。	家庭学習時間が 90 分以上の生徒の割合 A：80％以上 B：60％以上 C：40％以上 D：40％未満	学習時間調査を、定期考査前の 7 月と 11 月に各 7 日間実施した。1 日の平均は第 1 回が 108.6 分、第 2 回が 92.3 分であった。90 分以上の生徒の割合は第 1 回が 55.3％、第 2 回が 50.3％（昨年度第 1 回 47.9％、第 2 回 42.7％）であった。	C	1 日の平均家庭学習時間 90 分以上の生徒の割合が 2 回とも 50％を上回った。長期の臨時休業期間に課題に取り組むことによって、家庭学習の習慣を身につけた生徒が増加したと考えられる。一方で、家庭学習時間 0 分の生徒が考査日に迫って、その人数は減少しているが、一定以上見られたので、計画的に学習を進められるよう促したい。
総務	P T A 活動の活性化を図り、年間に 3 回以上の保護者の来校をめざす。	メール配信やウェブサイトなどを充実し、総務部企画の P T A 総会や P T A 研修会だけでなく、体育祭・石高祭など保護者も見学、参加が可能な行事の情報も発信する。	保護者の来校回数について A：全ての学年とも 3 回以上 B：2 つの学年で 3 回以上 C：1 つの学年で 3 回以上 D：全ての学年とも 3 回未満	保護者の来校回数は、1 年 2.5 回、2 年 2.9 回、3 年 2.1 回、全体で 2.5 回であった。P T A 総会と体育祭が実施できなかったことが影響している。学期に 1 回の割合で、年間 3 回と設定した経緯があるが、今年は入学式と 6 月から 12 月までの約半年間の数字としては、多く来校いただいている。	D	来校回数を指標にしたのは、P T A 活動等をとおして保護者に学校の指導内容（学習・進路・生活など）や行事などの情報を提供すること。それが生徒と保護者の対話の機会に繋がることを目的としている。新型コロナウイルス感染防止の新しい生活スタイルが求められている今日では、指標を「学校の H P や保護者メールその他の学校からの情報や直接来校したことが、家庭での対話に役立っているか」に改めてはどうかと考える。

学 校 自 己 評 価						
年 度 目 標				年 度 評 価		
領域	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
生徒指導	・ 基本的な生活習慣を身につけさせる。 ・ 本校の「いじめ防止対策基本方針」について保護者、生徒、教職員への啓発を行う。	・ 欠席理由をはっきりさせる。 ・ 遅刻回数の多い生徒は、保護者に連絡し、改善の依頼をする。 ・ 本校の「いじめ防止対策基本方針」についてＨＰ等で理解を深める。	次の数値目標が達成できたか。 出席率：99%、遅刻：1.5回/1人、早退：0.2回/1人 Ａ：すべて達成できた Ｂ：2つ達成できた Ｃ：1つ達成できた Ｄ：達成できなかった	遅刻:1.4回／1人、早退:0.2回／1人、出席率:98.7%という結果だった。コロナ禍での休校もあり、昨年と比較することは難しいが、落ち着いて学校生活が送れている。 ・「いじめ防止」については、保護者の評価が低かったが、今後いじめのない学校になるよう取り組んでいきたい。	B	・コロナ禍での休校や出席停止扱いもあり、出席率は悪くない。生徒は落ち着いて学校生活を送れている。しかし、ギリギリに学校へ来る生徒も多く、声かけを粘り強く続けていきたい。 ・家庭との連絡を密に取りながら、厳しく服装指導を続けていきたい。 ・生徒の変化を見逃さず「いじめを許さない」指導を継続していきたい。
進路指導	生徒一人ひとりの進路実現をめざして、早い時期から進路意識を高めさせたい。そのための適切な進路情報の提供、ガイダンス等の実施、各種説明会への参加、進路相談の充実をはかりたい。	・ 基礎力診断テストの実施により、自己の実力を把握し、成績および進路意識向上のきっかけとする。 ・ 求人などの企業の情報及び大学等の情報を、ホームルームや配布物を通じて早い時期から生徒に提供する。 ・ 校内進学説明会、就職説明会の充実を図る。	・ 進路希望調査の「未定」者が1年生で10人以下、2年生で5人以下であること。 ・ 3年生の就職希望者で、「アルバイト等、未定」がいないこと。 ・ アンケート等の結果で、A、Bで8割以上を得ること。	・ 進路希望調査での「未定」者は、1年生4名、2年生7名であった。 ・ 3年生就職希望者については未定者はいないものの、短期雇用・派遣での就職が2名であった。 ・ アンケート結果については、1年2年保護者による評価が低下している。	C	コロナ禍による臨時休校のため、年度始めの進路指導に関する行事やホームルームが縮小された影響が非常に大きいと感じた。また、昨年末からの緊急事態宣言により、3学期に予定していた校内説明会なども中止となり、とくに2年生の進路選択に関しての情報提供が不十分であると感じている。担任との連携を強化し、進路についての相談機会を増やしていきたいと考えている。
人権・同和教育	子どもたちの自尊感情を高めることにより、自分というかけがえのない存在を大切にし、そのうえで他者を思いやる気持ちを育てたい。	・「やればできる」という経験をさせるために、様々な場面で成功体験をつませる。 ・「自分」という存在の大切さを認識できるよう声掛けを行っていく。 ・HR活動での授業を通して、様々な人権課題について考え、他者への相互理解を深めていく。	・「自分という存在」を大切に思えるか。 ・「やればできる」と思えるようになったか。 ・「人と違っていても自分が正しいと思うこと」は主張できるか。	アンケート結果については、昨年度同様、高い数値が出ている。コロナ禍による影響が予想されたが、今の状況において、「他者」を大切に思う気持ちが高まり、その結果、「自分」という存在も大切にできるようになったと考えられる。人権・同和HRにおける生徒の感想にも、現状を踏まえて、昔からの理不尽な差別について考え直すきっかけとなっている。	B	コロナ禍において、普通が普通でなくなり、子どもたちにとってもストレスの溜まる生活を余儀なくされている。しかし、そのような現実が、子どもたちに他者を思いやる気持ちを強く意識づけさせたことも事実である。次は、今以上に自分のことを大切にし、「やればできる」という自尊感情を高めてもらいたい。HR活動や学校行事を通して、他者と交わりながら自己評価を高めてもらいたいと考えている。
環境保健	生徒自身が健康維持・管理を自ら実践する能力を高めるとともに、災害から身を守る備えをしておく。	健康生活の基本は、食事と睡眠からを認識させる。 防災・減災意識をしっかり身につけさせる。 ・朝食は必ずとる。 ・睡眠時間は最低6時間以上とる。 ・非常持ち出し物の準備ができている。 ・非常口、避難経路の確認は常にできている。	A：4項目中4項目達成 B：4項目中3項目達成 C：4項目中1～2項目達成 D：いずれも達成できず	防災・減災意識については、まずは自分自身の身を守るための備えを拡充させたい。 健康管理については、食生活において、もう少し具体的な目標を設定して食事の内容についての意識向上をはかりたい。	B	コロナ禍での健康管理については収束のめどもまだたっていないので感染対策は継続していくことは不可欠である。防災・減災についても、まずは自助意識を高めてほしい。そのための非常持ち出し物の準備は徹底していきたい。
特別活動	生徒が主体的に企画・運営するとともに、社会に貢献できる生徒会活動を目指す。	・ 学校行事を新しい方法で運営したり、生徒会役員を増員したりすることで生徒会活動の活性化を図る。 ・ ペットボトルキャップ回収に代わる新しいボランティア活動を提案する。 ・ ボランティア清掃を定期的に行い、必要があれば追加して行う。	A：3項目中3項目達成 B：3項目中2項目達成 C：3項目中1項目達成 D：いずれも達成できず	・ 体育祭は中止せざるを得なかったが、石高祭はなんとか実施することができた。 ・ ペットボトルキャップ回収は最後の納入を終えたが、新しいボランティア活動を始められていない。 ・ ボランティア清掃を実施し、生徒の美化意識を高める活動となった。	C	・ 体育祭は4月開催を予定しているので、今年度中に実施計画を練っておきたい。 ・ 生徒会の役員数が少なく、学科も偏っているので行事の運営には十分な準備が必要である。 ・ 力を注ぐべきところには生徒・教員が協力して取り組み、簡素化できるところは省力化することが必要である。
教育相談	・ 生徒や保護者が教育相談を活用できるよう環境を整える。 ・ 支援を要する生徒に対して継続的で効果的な支援を行う。 ・ 教職員へ教育相談に関する啓発を行い、生徒理解を促す。	・ 学校行事やメール配信等の機会を通じて、生徒や保護者に教育相談の情報を提供し、その利用を呼びかける。 ・ 支援を要する生徒の情報を教職員で共有し、連携して支援を行う。 ・ 現職教育や、職員会議の際に教職員に対して啓発や情報提供を行う。 ・ SC・SSWによるHRや個人面談を実施する。	A：4項目中4項目達成 B：4項目中3項目達成 C：4項目中1～2項目達成 D：いずれも達成できなかった	・ 今年度「SC・SSWに相談できることを知っている」と答えた保護者は89.1%、生徒は83.6%であった。また、教員の教育相談活用度は97%と概ね好評であった。しかし1年生の保護者は67%と低く、休校や行事の中止の影響が出ていると考えられる。 ・ 教職員への情報提供やSC・SSWによるHR等の実施は円滑に行えた。	B	・ 長期的な支援を必要とする生徒については、学年団や学科と連携し、引き続き丁寧に対応していく。 ・ 今年度は中止した新入生対象のグループ面談や、外部講師を招いた講座などの行事を実施していきたい。また様々な機会に教育相談の活動について周知し、その活用を呼びかけていく。